ル」紙に出た記事を転載している。それは、次のようなものである。―日本において、日本人のキリスト教徒に対する極めて野蛮な迫害が再び行われている。1870年に行われた残虐行為が今また繰り返されつつあり、佐賀藩の大名がその扇動者で、朝廷の役人が拷問の監督者となっている。「長崎ガゼット」紙は、この問題についての長い記事を載せている。迫害の対象としてみせしめのための犠牲者の数は2,000人にのぼっている。彼らは捕らえられ、少数グループに分けて強制的に連行された。できるだけ事を荒立てないように、目立たないようにやり方でこれが行われているので、日本帝国の対外に与える印象は前よりはよくなっている[31]

上記の記事に対して、岩倉はワシントンで「我々は文明開化を求めて当地にやって来たのであり、ここでそれを発見して嬉しくと思う」と述べたのである。ここで「文明開化」と「進歩」への岩倉の関心は、制度的改革だけでなく、本質的な改革が必要であると表明している[32]。一方、渡米の船中で、岩倉は同乗したアメリカ宣教師との面談を行い、宗教問題についてたずねた。また、サンフランシス上陸の前に、キリスト教問題と信教自由の論争は船中で始まり、アメリカ上陸と共にさらに激しくなった。特に、使節団はワシントンに向かった途中で、Salt Lake Cityで地元のモルモン教徒への政府の対処を見学し、信教の自由政策を執るアメリカ政府のやり方を窺えた。したがって、副使の伊藤と山口は信教自由について即時採用を訴えたが、伊藤は一時帰国を通じてキリスト教解禁を留守政府に強く訴えた[33]。そこで、上記の記事はそれまで現れた日本の進歩の印象、及びアメリカにおける使節団の努力に対して多少の損害を与えた。

使節団一行は、2月29日にワシントンに入った。3月4日大統領の謁見式である。3月11日から条約改正予備交渉が始ったが、全権委任状の下付のために副使の大久保と伊藤は一時帰国となった[34]。これ以降、使節団は外交接触のかたわら、調査や見学を相次いで行った。

3月14日付のCongregationalistは下記のとおり使節団に好意を示した記事を掲載した。

多くの敬意を払われている、今国家首都で栄誉礼を受けている日本使節団はこれまでこの国を訪れた使節団の中で最も重要なのである。使節団は極東の諸民族において最も進歩的かつ前途有望な国家からきたのであるが、或は西洋からで言ったらどうでしょうか。今では彼らはアメリカ文明の影響のもとで奮起している。使節団が自らアメリカの社会制度を学び、その考え方や考えによる実例などを実際の進歩を促進することとして持ち帰る。そして、実用な態度や使節団の熱心さを通じて、同行した、貴族出身の五名の日本人の女性は、ここの我々の教育機関で日本朝廷の女性家庭教師として育てられる予定である。我々にとって、これは日本と合衆国との素晴らしい交流による成果であるとみられるが、また、我々はこうした成果が救世主の王